
虚無の魔女から英雄サマへ

朧夜あずり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無の魔女から英雄サマへ

【Nコード】

N6747Q

【作者名】

朧夜あずり

【あらすじ】

―虚無の魔女。その女の通った後は、何1つ残らない。故に、虚無―

―英雄様。500年前の戦争で帝国を滅ぼし世界を救った英雄様―
そんな伝説の残る世界。少女リーファは馬車の中で目覚めた。「え？私：売られるの？ドナドナ？」楽しく無い過去にはサヨナラ。自由な私バンザーイ！！少女の冒険物語。

伝説

深く深くに沈む意識。

もう二度と、目覚めることは無いと。

もう二度と、その瞳を見ることは無いと。

もう二度と、話すことは無いと。

もう二度と、その澄んだ声を聞くことは無いと。

そう思っていた。

そんな事実信じたくなかった。

だけど。

だから。

深く深くに押し込まれてしまった意識が、再び目覚めたとき。

私は、どうすればいいのか…分からなかった。

僕は、神に感謝した。

「ねえ！おばーちゃん！！英雄様のお話をしてー！」

頭の高い位置で髪を結び、白いパジャマを着た少女が、祖母のもとへ走る。

暖炉の近くで椅子に座り編み物をしていた祖母は、一旦手を止めて、駆け寄って抱きついてくる孫を愛おしそうに抱きとめた。

少女がおねだりするお話は、ほとんど伝説のようなものだ。

ずっとずっと昔に、まだこの国が他国と戦争していた時のお話。

「好きだねえ、お前は」

「うん！だって英雄様かっこいいんだもんー！！私もいつか英雄様みたいになるんだよ！」

「そーかい、そーかい。それなら、しっかりと話なくてはねえ」

「やったー！！」

祖母の膝から降りて小躍りし、少女は自分の椅子を持ってきてちょこんと座る。

「じゃあ始めようか」

ずっと、ずっと昔。

この国、ローデシア王国は帝国ゲルティと長い間戦争をしていた。

世界を手に入れようとする帝国に、自分の国を守るために王国は必死に戦ったが、少しずつ少しずつ領土を奪い取られていた。

優秀な魔法使いがたくさんいたにもかかわらず、帝国はそれを上回る戦力を持っていたから。

そんなある日、王国の辺境の村で、優秀な魔法使いが見つかった。

僅か12、3歳の少女の魔力は、当時王国にいたどの魔法使いよりも圧倒的に優れていた。

少女は、自分の国が滅んでしまうかと思うと、いてもたってもいられずに王国軍に志願した。

その少女の魔法は凄まじくて、あっという間に勝利を重ねていき、奪い取られていた領土を取り返した。

更には、他国に侵略していた帝国軍をも蹴散らし、終には帝国を追い詰める形となった。

しかし、帝国軍も簡単には負けを認めなかったし、それに皇帝は少女に匹敵するくらいの魔力の持ち主だった。

このままでは、いずれ帝国軍が再び力を持ち、世界を恐怖に染めて

しまうと考えた少女は、自分の命を投げ打つ覚悟をした。

少女の死と引き換えに、帝国軍は壊滅した。皇帝を失い、統率力を無くしてしまったからだ。

幼い少女の死に、王国の人々は大層悲しみ、彼女を英雄にすることを決めた。

国を救った英雄として、ずっとずっと未来まで、彼女の活躍を語り継いでいこうと。

夜色の髪をなびかせて

炎のように燃える赤色の瞳

彼女の心は、まるで聖母のよう

世界を救った英雄様

貴女の願いや思いが、人々を救った

美しき英雄様

安らかにお眠りを

「さあ、お前も自分のベッドで、眠るんだよ」

「…うん！ありがとう！おばあちゃん！！」

孫の去っていく後姿を眺め、再び編み物を手に取る。

今まで自分が話していたお話を、再び思い出してみる。

伝説としての英雄様は、先ほど話したままの内容だ。

しかし、事実としての英雄様は、謎が多い。

王国と帝国が戦争をしていたのは、今から丁度…五百年ほど前だ。

しかし、当時の記録らしきものには、少女が戦っていたという話は皆無。

そして、王国が保有する英雄様のお墓。

三十年ほど前に、その墓が荒らされる事件があったのだが、墓には何も入っていなかったのだ。

彼女を示すのは、夜色の髪と炎のような瞳、そして圧倒的な魔力。肖像画もない、遺体らしきものも無い。

ただ、御伽噺と、彼女が使っていたらしい武器などが数点残っているのみ。

英雄様などいなかったのだ、とする学者もいれば、絶対にいたと主張する学者もいる。

意見は別れ、未だに決着がついていない。

ぐるぐると堂々巡りをしてしまう思考を振り切って、老女は編み物をやめ、ベッドに向かった。

幸せそうに眠る孫の寝顔を、これまた幸せそうに眺め、自分も眠りについた。

ドナドナ事件（1）

ガタゴト

ガタゴト

「ねえ、リッツ…」

「フルーラ？何？不安？」

「まあね…。もしかしたら…殺されるかも…しれないし」

「…見世物小屋で売られるだけだろ？」

「解体ショーだったら？」

「…。大人しそうな顔して、よくそんな事言えるな、お前…」

ガタゴトと揺れる馬車。

大量の荷物を遠くの街へ運ぶために作られたそれは、かなり頑丈で大きい。

元々荷物を運ぶためだけのものなので、荷台の部分は、小さな段差に大層弱く頻繁に激しく揺れる。

荷台に乗っているのは、子供。

小さいものは十歳前後から、大きい子は十五、六の少年少女まで。質素な服装だったり、一般家庭の服を着ていたり、色んな色の髪の子供がいる。

人数は、二十人ほど。

荷台の扉には、大人でも縮み上がるような鋭い目つきの屈強な男が二人座っている。

子供たちはその二人から少しでも遠ざかるようにしてすわり、泣いたり、諦めたり、慰めあったりしている。

リッツと呼ばれた赤毛の少年は、この二十人ほどもの中でも一番の年長者らしかった。

そして、その隣に座るフルーラと呼ばれた緑髪の少女は、リッツと同じくらいの年齢。

「リッツ…」

「ん？」

「私たちのこれから不安だけれど…彼女は…もっと不安だわ」

「言ってる」

二人が哀れむように見たのは、荷台の隅に転がる少女。

この荷台に乗せられた子供たちは皆、誘拐されたか売られた子供たちだ。

どの子供よりも早く、この荷台に乗せられていて、そこからずっと寝ている少女。

最初は死んでいるのかと心配したが、息はしていた。

少女は：黒髪で、茶色く土まみれになった服を着ている。
長い黒髪にも、茶色い服にも：僅かに血痕が付着していた。

しかし、これから見世物小屋で売られる運命を思うと…ここまで熟
睡しているのもどーかと…。
と、二人が心配した時。

ガタンッ

と、馬車が一際大きく揺れた。

「きゃ！」

「フルーラ！」

他の子供たちも、突然の衝撃に折り重なったり、ぶつかったりして
いた。

「いたっ！！」

澄んだ声が聞こえ、黒髪の少女がむくりと起きた。

「いたたたた…。馬車くらい上手に運転してよねー！さいてー…

え？」

起き上がった少女は、海色の瞳を目いっぱい開き、キョロキョロと周囲を見渡す。

扉の近くにいる異質な男二人を見て、怯える子供たちを見る。

「どこ…どこ？」

「おじょーちゃん、やっと起きたか。今から皆で楽しい所に行くんだ」

「楽しい所…？このメンツで？」

「違う！！こいつらは俺たちを見世物小屋に売る気なんだ！！」

「見世物小屋…？え？私…売られるの！？」

リッツが叫んでも、少女はどこか他人事のように驚いた。

大して恐怖も怯えも不安も滲ませてはいない。

まだ…夢の中だとも思っているのだろうか…。

「赤毛の坊主にでも聞け！！」

男に服を掴まれ、黒髪の少女がポーンと放り投げられた。

見た感じ、十四、五歳くらいだろうか…リッツやフルーラよりも年

下のような気がする。

「赤毛の少年。緑の少女。よろしくね！」

にこやかに笑う少女は、この荷台の中では異彩を放っていた。

ドナドナ事件（2）

ガタゴト

ガタゴト

相変わらず、馬車は揺れる。

子供たちを乗せ、見世物小屋のある街へ向かって。

その場所に着けば、子供たちは奴隷商人によって売られていく。

帰りたい、と言って泣き出す子供もいれば。

元々、売られた身だからと諦めている者もいる。

そんな中で。

「私は、フルーラ」

「俺はリッツ」

「私は…リーファ！」

ニツと笑った少女は、顔の横で小さくピースをした。

随分と呑気な自己紹介を済ませ、三人で荷台の隅で声を潜めて会話

をする。

「リーファは、何故この馬車へ？誘拐でもされたの？」

「…さあ？」

「さあ…ってどういう事？まさか、昼寝してて気がついたら此処だったとか言わないでよ？」

「それが一番近い気がするなあ…。正直、覚えてないもん」

「じゃあ、寝るまでは何をしてたんだよ？」

「ん？戦ってたよ？」

「何と？」

「帝国軍」

大真面目にリーファが答えると、二人はキョトンとした顔になり、次第に頬が緩み始めた。

必死に笑いをこらえようとする二人に、リーファは訳が分からないと首を傾げる。

「お前…、それは夢の中の話かよ！」

「え？」

「リーファ：、帝国なんて四百年も前に滅んでるじゃないの。英雄様が滅ぼして下さったじゃない！」

滅びた：？と、二人には気づかれない様に、リーファは心の中でその言葉を復唱する。

帝国は、四百年前に滅びた。

英雄様が、帝国を滅ぼした。

フルーラの言った二つの事実を、頭の中で整理する。

どう考えても、その二つの事柄は自分の頭の中には無い。

自分が眠りに着く直前の記憶が曖昧なことが原因なのか。

いや、そうじゃない。

これは一体：？と、頭の中が混乱する。

「つかぬ事をお聞きますが、ここは何処の国？」

「ローデシア王国よ。寝ぼけたの？」

「夢と現実がぼんやりとしちゃって」

「リーファは、夢の中では英雄様だったのね。仕方ないわ。皆の憧れだもの」

うっとりフルーラは呟く。

英雄様：とはリーファにとっては馴染みの無い言葉、というか今の二人から聞いて初めて知った言葉だ。

フルーラがうつとりするくらいだから、相当なカッコイイ王子様なのだろうか。

「フルーラは英雄様が好きなの？」

「そりゃもう！！英雄様に憧れない人なんていません！帝国からの侵略を受ける王国！英雄様はその愛国心を持って、果敢に帝国に挑み続けた素晴らしいお方！夜色の髪が風になびき！炎のような瞳を鋭く帝国軍に向け！その強大な魔力と女神のような容姿に、帝国軍は為すすべもなかったそうです！」

あれ？と、リーファは首を傾げる。

フルーラは、女神と言わなかったか？英雄様は女性なのか？そして…夜色の髪に炎のような色の目、そして…魔法使い。英雄様の活躍した時期は…帝国軍と王国軍の戦争時代。

嫌な予感を通り越して、寒気すらする。

「英雄様は…女性？」

「ええ！女性というよりは、私たちと変わらないほどの年齢の少女だったそうです」

「うわあ…」

思わずこぼれた言葉に、フルーラが「何か？」と鋭くにらんだ。

女性が女性に対する憧れや尊敬の気持ちを持って何が悪いんだ…というフルーラの勘違いだったので、リーファは一生懸命に訂正したが。

そうか…と、とりあえず現状を飲み込むことに成功した。

あの戦争から五百年。

皇帝が死に、ガタガタになった帝国は百年後に滅亡したのか…。まあ、そりゃ、五百年あれば国も滅ぶし、人も変わる。世界が様変わりするのに、十分な時間だ。

ならば…私は何故、ここにいるのだろうか。

最後の記憶は曖昧だ。

死ぬつもりで、皇帝に…あの魔物の王に挑んだはずだった。

魔物の王が事切れたことは見届けたが…、自分もほとんど瀕死の状態で、立って歩くななんて事できなかった。

自分の名前に、存在に、こんなに不安を感じるなんて。

ドナドナ事件（3）

ガタゴトという馬車の音が、一定の間隔でする。
馬車の軋む音も、ずっと鳴りつづける。

子ども達の不安を膨らませながら。

あとどれくらいで目的地に着くのだろうか？

私は、この馬車の中でどれ程眠っていたのか？

気になることは後から後から沸いてきて、少し不安になる。

そもそも、私が此処にいる理由は何だろうか。

五百年前には、敵味方から恐れられた私が、あんな筋肉だけの男二人に負ける訳が無い。

ギリギリの生死の境をさ迷ったり、死地を駆け抜けてきたこの私が。

幾人もの人を殺め、血の海を渡ってきた私が。

見つめる掌をギュッと握る。

その瞬間、ある事に気が付いた。

「魔力が、無くなってる…」

人間の魔力は、その人を包むように在るのが本来の状態だ。

魔力が皆無の人間はいないが、魔法を発動するだけの魔力を持たない人間はたくさんいる。

逆に有り余る魔力を持つ人間は、包んでいる魔力の膜が分厚く、なおかつ濃度が濃い。

私は、後者であつた筈だ。

なのに、今はあまりにも…濃度も厚さも薄い。

「どうかした？」

心配そうに首を傾げるフルーラに、何でも無いよ！と笑う。

何でも無い訳無い！

これじゃ戦えない！

いや、この時代で戦う必要なんて無いのかもしれない。
帝国は滅びた…とはさっき聞いた話。

この世界の情勢が分からない。文化が、魔法が、人々の生活が。何一つ分からない。

私の…存在が薄いな…と、そこまで考えて、ふと思う。

五百年前の私が、存在感を持っていたのだろうか？と。

だって、あの頃の私は、ただの殺戮兵器だったじゃないか。

何が、英雄様だ。笑わせる。

誰がそんな意地の悪い名前を付けてくれたのだろうか。誰が、私を美しいなどと表現したのか。

そのような伝承を残してくれたやつを、殴ってやりたいと思うほどに、その綺麗過ぎる伝説は腹が立つ。

何も苦勞せずに、帝国を滅ぼしたと思うのか？

私が、王国の兵士として戦いたいと…そう志願したと言うのか？

王国騎士団の士気を挙げる存在だったと…今の人間は本当に思っているのか？

実態の無い英雄サマ。

綺麗な部分だけを強調された、美しい英雄様。

私であって、私ではない英雄様。

苛立ちをそのままに、拳を振り上げて床に八つ当たりしようとした

その時。

ゴトンッ

と、大きな音がして、馬車が急停止した。

勢いを削がれてしまった拳は空中で止まり、静かに下ろす。

「まさか…。着いてしまったのかしら…」

「そう…みたいだな…」

扉の近くで座っていた男の内、一人が荷台から出て行き、すぐに何本ものロープを持って戻ってくる。

「お前ら…大人しくしてねーと、首と胴体がサヨナラするぜ」

厳つい顔の男の一言で、荷台の隅で怯えていた子ども達がワーツと泣き出す。

その泣き声に合わせて別の場所で固まって座っていた子ども達も「助けてー！」と誰にも届かない声を挙げる。

男が持ってきたロープで縛られ、全員が馬車から降りる。

初めて見る、五百年後の世界。

それは、濁った空気を持ち、どんよりとした灰色の雲に覆われた…地獄のような街だった。

私の後から、ロープに縛られて馬車から降りたフルーラが、街の様子に顔をしかめる。

「フルーラ…。此処は？」

「本当の街の名前は…知らないわ。もうずっと昔から、奴隷や危険薬物の売買を行ったり、裏情報の取引がされている所。窃盗や殺人は日常茶飯事で、定期的に闇市も開かれているわ」

「名前の…無い街？」

「通称、ケイオス。常識的な人間は、まず近寄らない場所。そして、あの建物が、これから私たちが行く場所」

街の中心に、一際大きな建物…古びた城が見える。

濁って淀んだ空気を纏うのに相応しい程の不気味さを持つ古城。あれが、奴隷売買の会場なのだろう。

「リドルム…城…」

その古城を、胸を締め付けられるような思いで見つめた私は、懐かしき名前を呟いた。

まさか、こんな形で、生まれ故郷の地を踏み…生家を訪れるとは思わなかった。

ドナドナ事件（4）

「リドルム…城？」

不思議そうにフルーラが呟く。

彼女が首を傾げるのも無理は無い。

ついさつき、フルーラの口から“この街は名前を失っている”ことを聞いたのだから。

ケイオス…“混沌”の名前の通り、この街は世界の闇を凝縮したような街だった。

ありとあらゆる悪事の混在する…、真っ暗闇ではなく、ドロリとした不快感を増幅させる闇。

いっそ清々しいほどに見えなくなるような闇では無い。

「私の知っている街に、ちょっと似てたから」

「リーファの、知っている街？」

「そう。でも、こんなに不気味じゃなかった」

そう。決して豊かとは言えないが、貧しくても皆楽しく暮らしていた街だった。

観光地がある訳でも、商業が発達している訳でも無い。

名家がある訳でも、悪人が蔓延っている訳でも無い、のほほんとし

た街は、ほとんど国の中央政治からは置いていかれたようなもの。民家が多いから、かろうじて街ではあるが、一歩間違えば村とも呼べるような片田舎。

街の中心に建つ城には、十一の時まで、家族と住んでいた。

あの頃は、幸せだった。

いや、普通の生活を送っていた…と言える。

両親と、兄と姉がいて、末っ子として皆にそれなりに可愛がってもらって。

身分の差などほとんど無かったリドルムでは、城主の子どもも農民の子どもも訳隔てなく学校へ行き教育を受けた。

普通の、生活だった。

今は、憧れる程に。

「この街、随分と前に人がいなくなってる…。いつの間にか悪人共の巣窟になっていたのよ…」

事情を知らないフルーラは続ける。
私にとって、残酷な現実を。

「王国一の、奴隷商売の場所。此処は本当に、反吐が出る場所だわ」

「そう、だね…」

馬車の中でずっと扉の門番をしていた男たちに加え、更に六人の男たちが加わり、二十人程の子ども達を引きずるようにして歩かせる。運転していた男に加えて、この街で待機していたやつ等が加わったのだろう。

城につけば更に増えるかもしれない。

いや、むしろ、この街全ての人間が敵かもしれない。

魔法の使えない私には…敵わない相手だ。

自分の存在の根底すらも抉り取られる事態だと言うのに、私には何もできないのだろうか。

見れば、フルーラとリッツも何故か齒軋りして悔しがっている。

他の子ども達は泣きべそかいたり、SOSを出して喚いていたりするのに。

古城に到着し、重い木製の扉を開けると、蜘蛛の巣が張り煤けて破れた絨毯の敷かれたロビーがある。

汚くなっていることを除けば、五百年前と変わらない事に涙が出そうだ。

きつと：他の部屋も何一つ変わっていないのだろうか。

正面に続く大扉の向こうの大ホールは、極稀に街の人たちを招いての宴会が開かれていたが、今は恐らく奴隷オークションの会場だろうと予想する。

そのまま大ホールに連れて行かれるのかと思ったら、私たちが連れて行かれたのは、ロビー左手の扉をぐり入り組んだ廊下を越えた先の牢屋だった。

「何ここ…」

石を積みあげ作られた地下牢は、大人ですら数十人入っても余裕なくらいの広さだった。

鉄格子の小さな扉を開け、冷たい石畳の上に次々と放り投げられる子ども達。

私やフルーラ、リッツと順番に放り投げられ、最後のリッツが石畳に屍餅をついたとき、扉は完全に閉ざされた。

「牢屋：のようね。元々この城にあったようなものじゃ無さそう…。明らかに奴隷商売用って感じね」

加えて言うならば、さっき通ってきたやたらと迷いそうな廊下も、元住人としては「何これ！知らない！こんな廊下知らない！！」と叫びたくなるものだった。

「オークションは夜に始まる。フルーラ、それまでに終わらせよう」

「ええ、当然よ」

いつの間にか、頑丈に縛られていた筈のロープをあっさりと解いて立ち上がる二人。

縛られたせいで、うつすらと鬱血した手首を撫でるフルーラとリッツの目は、奴隷商人に捕まった非力な子どものものでは無かった。

「フルーラ？リッツ…？」

「ごめんなさい、リーファ。そしてみんな。怖がらせてしまったこと、不安にさせたこと、本当に申し訳なく思っているわ。でも、私

たちはどうしても此処の場所に来なければならなかったの。この場所、奴等とあなた達が離れる場所まで来なければ、全員を守ることはなんてできないと思ってね…」

「白状すると、俺とフルーラは、ローデシア王国騎士団の人間だ」

すすり泣いていた子どもたちの涙が止まる。

希望を見つけた瞳が、生き残る可能性を見出した瞳が、赤毛の少年と緑髪の少女を見つめる。

期待の籠った視線に、力強く頷き、微笑む二人。

助かる…!! その時は、そう信じて誰も疑わなかった。

ドナドナ事件(5)

目が覚めてからずっと揺られていたのだから、今ここで落ち着けるというのは確かに有難いことではあるが。

それが冷たい石畳の上では泣きたくなるものだ。

まして、それが、住み慣れた城を改造されて作られた地下牢なのだから、苛立ちは募るもの。

早く此処から出たい。

そう切に願う。

まあ、それは、王国騎士団だという二人に任せればいいか、と思考を切り替えた。

鉄格子の扉の近くでなにやら相談しあうリッツとフルーラの邪魔にならぬ様、壁の近くでうずくまる。

すると、それまで一切喋ったことのなかった子どもたちが、ススッと寄ってきた。

「おねーちゃんは、騎士団の人じゃ無いの？」

先陣切って話しかけてきたのは、藍色の髪の十歳前後の少年。気づけばワラワラと集まっていた子ども達。

「私は違うよー」

「そうだぜー！このねーちゃん、ずっと寝てたじゃん」

「でもでも、おねーさんの服ってよく見ると騎士団の制服みたい…」

「ほんとだ…。でもすごい汚れてる…」

「これはね、着るものが無かったから着てるの」

嘘ではない。

王城にいた私に用意されたのは、お姫様が着るヒラヒラフワフワの服でもなければ、女官たちの着る制服でも無い。

戦う為に、戦争の為に、敵国の兵を一人でも多く消す為に。

この制服は、そんな意味を込めて私に用意されたものだ。

―夜の女神みたいなお前には、静かで落ち着いた色のドレスがきつと良く似合うのだろうな……―

そんな、齒の浮くような…まるで吟遊詩人の歌のような台詞をはいた人間は、後にも先にもあの人だけだった。

他のもの達は、それこそ、白地の騎士団服を血の色で染めて来いと言わんばかりだった。

着るものも無いのか…と子ども達に哀れんだ目で見られ、それに苦

笑を返したとき。

ふと、不思議な文様が目に入った。

長方形の石を積み上げて作られたこの空間で、その文様は壁を形成する石の一つに彫られていた。

近寄って、何だこれ…と呟きその文様を撫でれば、それまでおしゃべりをしていた子ども達以外の子から他にも色んな場所にあることを教えてもらう。

天井以外、そう、四方を囲う壁と床にまんべんなく描かれるその文様。

よくよく目を凝らせば、一つとて同じ文様は無い。

「何だこれ…」

いや、正確に呟くならば「何だっけこれ…」だ。

どこかで、見たことがあるのだ。

どこだったか…、この文様に似たものを、私は確実に見たことがある。

複雑で幾何学的な文様を指でなぞった。

「それじゃ、行ってくるわ」

唐突に告げられた声に、リーファも、リーファと共に謎の文様を眺めていた子ども達も驚いて振り返る。

「何処に行くの?というか、どうやって出るの?」

「姿を隠す魔法、そして自分の体を小さくする魔法。その術式を紙に書いたものを、魔術符というんだけれど…。今回の作戦にあたり、それを持ってきたの」

「魔術符…？ そんなものがあるの？」

「ええ。私たちが間諜として此処に潜り込むことが決定したときに、私の師匠が作ってくださったの。これなら、術式を書く手間が省けるでしょう？ 魔術用のペンは見つかって没収される可能性も高いし…」

魔術符に、魔術ペン。

どちらも五百年前には無かった物だ。というか…そんなものはいらなかった筈だ。

自らの指先に魔力を込め、空中をあるいは地面をキャンバスに見立てるかの如く、魔方阵を描く。

魔方阵を描く際に、詠唱もあれば尚良い。威力も制度も格段に上がるが、基本は魔方阵だけだ。

詠唱破棄は、ある程度の経験を積みめば、それなりに力のある魔法使いは可能なことだが、魔方阵すら描かずに魔法をぶっ放す人間は、ほぼいない。

いない…というか。

リーファにしか、できなかったという方が正しいか。

ほとんど無動作で魔法を放つことが可能なリーファだが、無動作というのも曲者だった。

味方に対して、どのような魔法を今から使うのかが示せないからだ。

あの当時、味方なんて自分は思っていなかったが、万が一王国側に上級破壊魔法を繰り出されては堪らない、という訳で王国からそう命令されていた。

「便利なものがあるんだねえ…」

「割りと有名な筈だけれど…？まあ、武術担当の俺にはあんまり縁が無いけどさ！」

「そんな訳無いでしょう？！魔法が使えない人も、この術符があれば可能なんだから、むしろ重宝するわよ」

「ヘーリッツ、魔法使えないんだ？」

「うるせー！成績が悪かったただけだ！」

「コホン。無駄口はこれくらいにして。私は今からそれらの魔法を使って、この城の中を見てくるわ。敵の数、位置、騎士団の侵入できそうな経路、私たちの退路を見えます。一応こっちはリッツに任せるけれど…、心配だからリーファにもお願いするわ」

「おいっ！お前…！一応、俺仲間だぞ！」

「おっけー！分かった！」

「わかななよ！」

一通りの漫才が終わる。

これで本当に捕らわれているのか……と不安になってくるが、私も子ども達も、騎士団の二人が大丈夫だと言ったのだから、大丈夫だろうと安心していた。

フルーラの握り締めた魔術符が、燃えて灰になるまでは。

ドナドナ事件（6）（前書き）

今回から、少々お話が長くなっています。

ドナドナ事件（6）

信じられない…。

一体何が起こったのか、目の前で起こった事なのに、しばしの間理解が追いつかず呆然としてしまった。

二つの魔法を駆使して、内情を探りに行こうとしたフルーラ。

鉄格子の扉の前に立ち、一度みなの方を振り返って、安心させる微笑みを浮かべた。

二枚の魔術符を重ねるように持ち、騎士団らしい鋭い目つきで。

【発動】

と、呟いた瞬間。

ボロボロと残酷なまでに、魔術符が灰となって消えた。

フルーラの右手の中で小さく炎が上がり、魔術符は消えた。まるでこの牢獄から逃げることを阻むかのような意思すら見て取れる炎。

呆然と掌を見つめるフルーラと、そのフルーラを見つめ、何が起きたのか理解が出来ない子ども達&リッツ。

「嘘…どうして…」

信じられないわ！と叫び出しそうなフルーラだったが、それを何とか抑え予備の魔術符を取り出す。

「だめ！フルーラ！待って！」

「リーファ？どうして？」

「さっきの見たでしょう？魔法が妨害されていたでしょう？」

「妨害…？私が詠唱を間違えたからじゃなくて？」

「違う！この空間では殆どの魔法が使え無いの！」

その言葉に、初めてフルーラの顔色が曇る。

「何で…」

何で魔法が使え無いの？

何でそんな大掛かりな妨害を？

何で…そんな事が分かるの？

フルーラの呟いた台詞の言外の意味を感じとり、フルーラとリッツを、先程子ども達と発見した見慣れない文様：否、魔法陣を見せる。

「これ、見たことある？」

二人に尋ねると、二人とも首を振った。

「これは、禁止の魔法陣」

扉の下にある魔法陣で、空間を指定する。

その後は、その空間内に特定の魔法を禁止する魔法陣を描いていけば…。

「魔法を使え無い空間ができるって訳。ちなみに、さっき見つけただけで、転位・変化・攻撃・伝達系統は無理ね」

姿を相手から見えなくなしたり、身体を小さくする魔法は変化に属するから、その魔法に反応して魔術符が燃えたということだった。

「ちょっと待って…！それじゃあ此処から出られ無いんじゃない？」

悲鳴のような声音。

改めて突き付けられた現実、みな顔色が変わる。
攻撃魔法で牢屋を破壊することも、外に助けを呼ぶことも叶わない
と言われたのだ。

「ううん。出られるよ。その為に、二人の手を貸して欲しいんだけど、どお？」

「もちろんよ！」

「当然！だけど…何すんの？」

「もちろん、当初からの作戦が変わると思う。でも、できるだけそ
ちの作戦に合わせたいから…教えてもらえる？」

顔を見合わせる二人。

私が間諜である可能性を探っているのだろう。
しばし思案した後に、ゆっくりと二人は頷いた。

「掌を出してくれる？今から、二人の掌に魔法陣を描きます。ちょ
っとだけ発動時に痛みを伴うから我慢してね」

不思議そうな顔をして、片手ずつ出す。

まずはリッツから、と手をとる。

そばにあった鉄格子の扉の金具がめくれて尖った部分に自分の指を

刺す。小さな切り傷ができて、皮膚の下から血がプクリと溢れツウと流れる。

その様子を見て、フルーラとリッツが慌てるが、そんな二人を制止する。

「他人の血でなんて、ちょっと気持ち悪いかもしれないけれど…」

一言だけ断りをいれ、親指から流れ出た血を使って、すばやくリッツの掌に魔方陣を描く。

驚いて固まっているリッツの手を離し、今度はフルーラの手をとる。

「嘘…。こんな…血で…魔方陣…？」

困惑したままの二人。成り行きをただじっと見守る子ども達。危ないから、子ども達は壁際に行つてと指示を出す。

「それよりも！魔法は禁止なんだろう！？」

「そう。そこら中にある魔方陣で禁止されている魔法はね」

「つまり…禁止されていない魔法を使うの？そんなの…役に立つの？」

「もちろん。ただ、ちょっと消費量が半端なくてね。私の魔力だけじゃ足りないから、二人から借りるね」

サラッとなんだか恐ろしいことを言う。

フルーラの顔が、引きつったまま固まった。

【我が呼びし名を持つ者よ　我が声に応え：　召還魔術　アイオン
！】

石を積み上げ作られた冷たく無機質な空間の、中央に立つ一人の少女。

その少女を中心に、静かで、しかし全てを容赦なく飲み込む光が爆発的に溢れた。

音すらも飲み込む真っ白な光は、しかし、牢獄の外へは漏れていかない。

騎士団所属の二人も、壁際に下がっていた子ども達も、目を瞑ってもまぶたの向こう側から刺すような光に顔を手で覆う。

そのお陰か。召還魔法を発動した瞬間の、リーファの瞳が鮮やかで強き意志をもつ炎の色に変わっていたことは、誰も知らない。

数秒の後に、恐ろしさを感じる程の光が、収束していく。

全ての光がどこかへ消えたのを確認しつつ、まだクラクラする感覚に叱咤して瞳を開ける。

眼前がチカチカしているのは、恐らく気のせいではないが。

「きゃああゝゝゝ！リーちゃゝゝゝんゝゝゝ！会いたかったのゝゝゝ」

つい先程までの、あの緊迫した雰囲気を全く無視して、幼い少女の甲高い声が響く。

不思議な面持ちでその声の主を探すと、その声は部屋の中央に立つ黒髪の少女にしがみ付いていた。

「ちよつと…離れようか、アイオン」

「やあだあゝ！しかもゝ、アイって呼んでよゝ！可愛くないのゝその名前ゝ」

リーファの顔を覆うように、まるで懷きまくって飼い主大好き！！な猫の如くリーファにすりよる、齡六歳程の幼女。
艶やかで、銀糸かと思まごうような長いプラチナブロンドを頭の高い位置でツインテールにして、不思議な服を着ている。
ヒラヒラした装飾は、まるで天女のそのよう。

「離れて、アイ」

「えゝゝ！だってゝリーファと会えるのゝごっ」

五百年ぶりなんだよゝ？と可愛らしく甘えるはずが、そのリーファ

に顔面を鷺掴みにされてその次の言葉が出ない。

空いていた手で、今度はアイのツインテールを鷺掴めば、頼りなくプラプラと宙に浮く幼女。

その顔は、明らかに現状に対する不満を物語っている。

「その続きを言ったら、どうなるか分かってるよね？」

「えゝ？どうな」

「二度と呼ばない」

「やだー！！アイだってこっちに来たいのー！！あっちつまんないのー！！」

「じゃあ、約束して」

「はあーい」

私は良い子、とでも言うようにしっかりと右手を挙げて返事をする。そこまできてやっと、アイは地面に足をつけることができた。

「ねえ…リーファ。きちんとした説明を貰える？」

「あ…ああ、そうね。この子はアイ。正確には現象の時間を司る神様アイオン」

えへ☆と可愛らしく笑う少女を皆がまじまじと見る。

この：ちよつとアホ：いやいや、少しお転婆っぽい小さな女の子が？いやしかし、さっきの召還で出てきたのだし…。いやそもそも、召還魔法なんて、今時：宮廷の魔術師たちでも簡単にはできないものを、今この少女は魔方阵無しで簡単な詠唱のみでやってのけたよね？大体さ、他人から魔力借りるなんて芸当、出来る奴が存在したわけ？血で魔方阵を描くなんて：、古代魔術師じゃないんだから：ってか、英雄様並みの魔力持ってる？いや：魔力はそんなに無いな：リッツよりちよつと多いくらいで…。

ええ？何これ：混乱してきた：、と頭を抱えるフルーラ。その胸中にはとめどなく溢れる疑問の山。

「さて、作戦会議を始めますか」

そんな、混乱するフルーラをそのままに、リーファは横に立つアイの頭をポンポンと撫でる。

登場の仕方があまりにも派手であったが、ニコニコと笑っているアイに子ども達は無害なものであると判断したのか近くに寄ってくる。例え小さな子ども達といえども、厳しい環境・辛い生活を強いられてきた彼らには生きる知恵というものが備わる。

害あるものか否か、を判断できなければ：死に繋がるからだ。

そんな勘とも呼べる感覚が、アイは無害だと大丈夫だと言っている：らしかった。

「じゃーまず！二人が潜入したのは何で？」

「あ：ああ。俺たちが潜入した理由か。この街にははるか昔から強

力な結界が張られている。中の住人が仲間と認めたものの以外は通り抜け出来ない：嚴重な関所みたいなんだ」

「へー。だから、騎士団として攻め落とす訳にはいかなかったと」

「そういうこと。少しずつスパイを送り込んだりして、最近になってやっと、この屋敷の中に結界を統括している者あるいは物がある事が分かった」

「だから、私たちの目的は中に入ってその統括者を破壊する事。そうする事で、結界は無くなりこの街を制圧できる」

しーん、と静まり返る牢獄。

つまりは：その結界を何とかしないと騎士団は進入できないし、自分たちは助からないのだ。

騎士団の二人の言い分からでは、恐らくその結界を統べているものはまだ見つかっていないのだろう。

「くんくん」

緊張の走る空気の中を、可愛らしい声が暴走していく。

周囲の匂いに、食べ物の匂いでも混じっているのか？お腹が空いたのか？と皆の訝しんだ目を向けられても気にすることなく、アイは匂いを嗅ぎ取る行為に夢中だった。

「……何してるの、アイ」

「その結界：誰のものかなーと思って」

「わ、分かるの?! アイちゃんッ!？」

さすが、そんな見てくれでも神様ね! とブラックな発言に嬉しい悲鳴を乗せるフルーラ。

そんなフルーラに少しだけむくれながらも、アイはその結界の作成者の名を告げた。しかも、リーファの方を見ながら、ニヤリと笑って。

「虚無の魔女」

え……? と、リーファの顔が引きつった。

ドナドナ事件（6）（後書き）

お気に入り登録して下さった方、評価を入れて下さった方、本当にありがとうございます。

ちよつとの事でも嬉しいので、今は全力でマラカス持って踊りだしてしまおうです。今後も頑張っていきたいと思いますので宜しくお願いします。

ドナドナ事件（7）

虚無の魔女。

それが意味するものを本当に理解しているのは、この場ではリーファとアイだけだった。

「虚無の…魔女って？」

恐る恐るフルーラがたずねる。

リッツも首を傾げているし、子ども達同士でも、そのような魔女の話は聞いたことが無いと首を横に振っているものばかりだ。

魔女の名前を告げた本人はニヤニヤしているし、告げられたリーファは困惑した表情を浮かべていた。

「…魔女の通った後は、何一つ残らない。全てを暴力的な魔法で虚無にする”なんて、言われてた魔法使い」

「あー！それ、あたしのおばーちゃんが言ってた！五百歳を超える魔女って！！」

唐突に、一人の少女が声を上げる。

先ほどりーファと一緒に禁止の魔方阵を探していた少女なのだが、その少女の声に皆が振り返る。

「五百歳…。まあ…そうなのかもね…」

ふむ、とフルーラが考える仕草をする。

魔法の効果というのは、基本的にその人が生きている間だけだ。

その魔法に使用した魔法陣と詠唱を誰か別の人が受け継がない限り、発動者の死と共に魔法の効力は消える。

しかし、この街の周囲を覆う結界はそれこそ帝国との戦争時代から続いているらしいので、五百歳という計算は合っている。

「魔女の結界…。それは、私に任せてもらえない？」

「え？リーファが？」

「心当たりが…あるから。この結界を保っているものに…」

「心当たりがあるなら…それを私たちが壊してくるけれど？」

フルーラの言葉に、リーファはふるふると力無く否定する。

それでもその意思是、譲らないと訴えていた。

「今からアイの力で結界の外に転位させるね。二人は、子ども達を安全な場所に。丁度その頃には、結界は無くなっている筈だから騎士団と合流して」

「それは…構わないけれど、貴女はどうするつもりなの？一人でこの城に留まるつもり？」

何人のゴロツキが、何人の戦い慣れた魔法使いが、剣士がいるのか分らないこの城の中にたった一人の女の子を残していくことに不安を覚えるフルーラとリッツ。

「大丈夫だよ」

「リッツを貴女に付けるわ。これだけは譲らない。いいわね？」

有無を言わせない強い口調に、苦笑しながら頷くリーファ。
任せる、とでも言うようにグッと拳を握り締めてみせるリッツ。

「話は纏まった〜？じゃあ、振り落とされないようにい、皆お手手つないでね〜」

「アイ、お願いね」

「私の心配より、自分の事心配したらあ〜？転位したら〜そのまま帰るからね〜？」

「…分かってる」

「それと、後払いでもいいんだけどお？」

「アンタを呼ぶのに、これだけ魔力削るのに？馬鹿言わないで」

「相変わらず頑固ねえ。……死なないで。約束は…守ってよ」

プラチナブロンドの前髪の下から覗く、綺麗な金色の瞳が心なしか潤んでいる。

黒髪の少女と交わした、アイの…いやアイ達の約束。

彼女はそれを一度破っているから。

だから、もう一度強く念を押しているのだ、この小さな体躯の神様は。

間延びした口調が、一瞬だけ切なげに言葉をつむいだ事に、フルーラとフリッツはハツとする。

この二人の少女の間には、あまりにも強い絆がある。

騎士団の学校で習ったような、召還者と召還された者との間にある形ばかりの契約などという言葉で彼女たちを表すのは失礼だと思うくらい。

「それじゃあね」

「うん。それじゃ」

「気をつけろよ、フルーラ。団長に言伝頼む」

「分かったわ。二人とも気をつけて」

「バイバイー！」「おねーちゃんとおにーちゃん気をつけてー！」などと、子ども達が手を千切れんばかりに振っている。

フルーラと子ども達が集まっているところにアイが近づき、フルー

ラの手を取る。

アイが小さく何かを呟くと、小さな神様から徐々に真っ白な光が溢れ、周囲に拡散する。

少し離れた所で見守っていたリーファとリッツを飲み込むことは無く光は収束する。

光が光源もろとも消える頃には、牢屋の中には二人以外は居なかった。

「俺たちも…行くか?…っておい!」

ついさっきまで隣に立っていた黒髪の少女が、蹲っていた。

リッツも同じように蹲ったときに、ふとあることに気がつく。

少女が荒く浅い呼吸を繰り返し、さらには…大きな血の染みができていることに。

「お前!どうしたんだ!」

「大丈夫。その内止まるから…」

「大丈夫って…」

「早く…身を隠せるところを…アイが…、扉…開けてくれた…」

リーファの言葉にリッツがパッと扉を見ると、確かに鉄格子の扉が

開いている。

いや、開いているというか…正確に言えば、何故か腐りボロボロになって形が保てなくなっている、という表現が正しかった。

「何だこれ…」

「さあ、此処から出るよ…」

「あ、ああ！で？魔女の結界は？」

「大丈夫」

「は？」

間抜けな顔をして一瞬立ち止まるリッツだったが、ヨロヨロとリーファが牢屋を出て行くので、慌てて追いかける。

リーファは、左腕を庇いながら歩く。

足を怪我している風では無いが、体力が無くなっているのか、血を多く出してしまったことによるものなのか。

治癒系統の魔法も使えないし、簡単な応急処置しか心得の無いリッツには、リーファに肩を貸すことくらいしかできなかった。

ケイオスの街。

この街は、ずっとずっと昔からそう呼ばれている。

ローデシア王国にとっては癌のような存在で、この街の周辺にもゴ
ロツキやならず者といった取り締まるべき人間が多く住み着いてい

る。

そして、彼らのような悪いことに手を染めた人間：あるいは“商品”である奴隷以外には街に入ることは叶わない。

それは何故かこの街の周囲を覆う強固な結界のせいだ。

街に住む住人が認めたものしか入ることができない：という限定的な制約を設け、なおかつ数百年の時を経ても尚消えない圧倒的な力。

王国は、すでに何人ものスパイを送り込んだ。

最近になってやっと、街の中心にある古城の中に、“結界を維持する物”が存在することを突き止め。

騎士団最年少のフルーラ・アコットとリッツ・ベルバルの二名が、“商品”として潜り込んだ。

約束の日は、今日。

二人と、二人の所属する騎士団が交わした約束。

二人は今日この日に、結界を破壊すると。

そして破壊された直後に、騎士団はこの街に乗り込み制圧すると。

街は高い堀で囲まれており、入り口は三箇所。

北と南と西。

正面である南口には、三箇所内、一番強く配置がされている。

騎士団長を筆頭に騎士団のメンバーはもちろん、三箇所に配置された王国軍兵士たちも、後方で補給係として頑張っている者達も緊張していた。

ついに、王国の癌を滅ぼすのだから。

闇の中に沈むように、物音のしない恐ろしく静まり返った夜。

緊張走る、その一群の中に…その光は唐突に現れた。

「な！何だ！！」

「団長！お下がってください！」

白に埋め尽くされる視界が、騎士団員や兵士たちの平常心を破壊する。

これは異常だと、長い事兵士として生きてきた者達の第六感が警告する。

半ば本能的に、光に剣の切っ先あるいは銃口、あるいは魔方陣の準備をしていると。

光が無くなり、そこから姿を現したのは、全員子どもだった。

「ラカント団長！」

子ども達の中で一番に声を上げたのは、緑髪の…子ども達の中では最年長らしき少女。

「フルーラ・アコットか！これは…一体？」

「団長。すみません、予測できない事態により急遽作戦を変更させて頂きました。しかし、もう間もなく結界は破壊されます。突入は、作戦通りお願いします」

「あ…ああ。分かった。事情は後で聞く。君たちは休んでいなさい」

「いえ。私も突入します。リッツとリーファが中にいるんです」

「リッツ・ベルバルと…リーファとは？」

「それも後程に」

「魔女の結界…壊れたよお」

切迫した雰囲気の中で、やはりアイの間延びした甲高い声は目立つ。不思議な服装の幼女に兵士が剣の切っ先を向けるが、幼女はケラケラと笑うだけ。

「彼女は無害です。敵ではありません。我々を助けてくれました。
…アイちゃん、ありがとう」

「別に？お礼ならリーファに言いなよ」

「もちろんよ」

「じゃ、私はもう行くね。あ！そうそう、フルーラ、突入するなら治癒の魔術符をたくさん持っていた方がいいかもねえ？」

「え？」

それはどういふことなの？と、フルーラが聞き返そうとした瞬間、アイは悪戯っ子の微笑みだけを残して消えた。夜の景色が広がるその辺りに、アイの残した白い光の残像だけが焼きついている。

「お前ら、大変な量の報告書になるな…」

「お読みになられるのは団長ですからね」

「覚悟くらいしておくさ」

「フルーラねーちゃん！あの二人、絶対助けてよ！？」

「そーだよ！リーファねーちゃん！助けてよ！！」

今まで黙っていた子ども達が、堰を切ったようにまくし立てる。何かの目的の為に古城に残った二人のことが心配なのだ。

そんな子ども達に、フルーラは任せて！とサインを送る。

「全軍！突入！！」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「お前…大丈夫か？」

「だいぶ…平気」

牢屋を出た直後は、このまま死んでしまいそうだったリーファだったが、ゆっくりと廊下を進む内にかなり体力を持ち直したようだ。しかし、二人は現在大量の奴隷商人あるいは彼らの雇った傭兵に追われていた。

「このままじゃ…結界破壊できないんじゃないのか？」

「ご心配無く。リッツは…此処にいて」

「あ？何言ってるんだ。俺はお前を護る為にいるのんだぜ？」

「私用の為に、リッツを危ない目に合わせられないでしょう…？」

「尚更だろ。着いてくぜ」

「馬鹿なの？死にたいの？」

「その台詞、そっくりそのまま返すぞ、馬鹿」

埒が明かない…と、リーファは諦めた。

このやり取り、実は牢屋を出てから何度と無く繰り返している。追ってくる奴等を撒きつつ、時に隠れつつ。

リーファは、古城の三階の一室を目指していた。所々朽ち果てて腐

っている木材や砕けたガラス破片に気をつけながら。

「この部屋か？」

「そう」

捻ったら壊れてしまいそうなドアノブを慎重に回し、二人は部屋に入る。

そこは、この城の元の持ち主の部屋らしかった。

部屋の主は、恐らく十歳くらいの少女。

蜘蛛の巣が張り、布や木材は朽ち果て、ガラスは周囲に飛び散り、玩具は錆び付いて動かない。

「子ども…部屋？」

「ええ」

リーファは、勝手知ったるという風にクローゼットや机の中を見て回る。

懐かしい。その思いで、心が壊れてしまいそうだった。

ドナドナ事件（7）（後書き）

前回に載せるの忘れてました。神様の名前については適当です。神話からそれっぽいものをチョイスしているので、その辺はサラッと流して下さい。

ドナドナ事件改めケイオス浄化事件

懐かしさに身を焦がしながら、リーファは部屋の隅々まで丁寧に見て回った。

「…追っ手に気付かれるんじゃないのか？」

ついさっきまで逃げて隠れてと逃亡劇を繰り返していた。だから、この部屋でリーファがゆっくりしていることを不審に思ったのだ。

「この部屋には魔法が組み込まれていてね。部屋が存在を認識させなくするの」

「えーっと…つまり？」

「この部屋は他の人には見えないの。だから、此处は荒らされた形跡が無いでしょう？」

他人に踏みにじられた形跡の無い、単純に年月だけを重ねた部屋。この部屋だけが、異次元のようだった。

「お前は、この部屋に何をしにきたんだ？」

「…依頼、だね。だから街の結界について知っていたし、この部屋のことも分かった」

始めからこの部屋を認識していれば、魔法の効力も防ぐことができるのだった。

「何を、探してるんだ？」

本当ならば、依頼についてもっと詳しく…何故こんな危険な依頼を

受けたのか、王国が手を焼く程の結界の解き方を知っていたのである。依頼人の正体などを聞いたかったがそれはやめておいた。依頼人の秘密は必ず守る子だと感じたからだ。

「：写真。この城に昔住んでいた筈の家族の写真よ」

「何百年前のだよ！朽ち果てたんじゃないのか？」

部屋の有様を見るに、写真が現存しているとは思えない。

リッツの言葉に、リーファはふと手を止めた。悲しそうに「そうよね…」と呟いた。

「これだけ探しても無いし…諦めるわ」

「依頼は未完か？」

「ううん。“無い”ことが分かって良かった。これで未練も無くなる…でしょうね」

部屋を見渡し、原型を留めているものたちを一つ一つ丁寧に撫でていく。それはまるで、久しぶりに帰ってきた我が家の家具に郷愁を感じながら別れを告げているようで。

「さあ出ましょう。外も騒がしいしね」

「外？」

「騎士のお仲間が突入したんじゃない？この音」

さっさと部屋を出ていくリーファをリッツは慌てて追う。

それにしても、早過ぎやしないだろうか…突入。この部屋に来て、まだ数分しかしていない。むしろ、リーファは何か解除の法をしただろうか？部屋の様子を見ただけだった筈。何故と問いただしてもきっと答えてくれない。彼女は、一体何者なのか。

外は、既に殆どを王国軍によって制圧されていた。あちこちに人が倒れていて、元々廃墟だったのが、更に不気味に恐怖を煽る様子になっている。

入口の大きなロビーの2階にまでやってくると、そこはほとんどが王国軍で埋め尽くされていた。

王国軍の、白を基調とし黄色のラインが入った制服を着た一群の中から、ややみすばらしい格好の少女が跳びはねながら走ってきた。

「リーファ！ リッツ！」

「フルーラ！」

「子ども達はどーしたんだ？」

「エニエス副隊長に任せてきたわ」

「げー、俺あの人苦手だ…」

どんな人なのか聞くと、苦笑いをする二人。相当な個性の持ち主らしく、会ってみれば分かるとの事だった。

フルーラに連れられて、古城の外に出る。

兵隊に連行されて行く奴隷商人やその傭兵たち。彼らの中には、何故あの鉄壁の結界が破られたのか不思議に感じている者も多かったという。

「リッツはCテントに行つて。私とリーファは副隊長の所に行くわ」

「ああ。……頑張れよリーファ」

「え…まあ頑張るよ」

町の中心部にある噴水広場を抜け、リッツは東へ向かう。リーファとフルーラは南へ向かった。

王国軍は、城だけでなく街全体を制圧していて、街の住人が悪人であることを除けばそれはかつての戦争と何も変わらない風景だった。この街に争いを持ち込ませないために、作った結界だった。魔法の効果はリーファが死ぬまで。だから死に物狂いで戦争を終わらせようとしたのに。

結果的に、五百年も消えない結界は悪人に利用され、いくつもの悲劇を生み出し、この街を忘れさせ混沌たるものにしてしまった。リーファにとってそれは、悔しいという気持ち以外の何物でも無かった。自分の行いは、果たして正解だったのか？

「リーファ。ありがとうね」

「え？」

「貴女がいなければ、私達の作戦は失敗。奴隷として売られてたものの」

「そんなこと…」

「ううん。本心よー！ありがとう！」

ニコニコと笑うフルーラに、リーファの中で罪悪感が生まれる。こうして王国軍や騎士団を苦しめたのは、リーファの作った結界のせいだし、敵の本拠地の中で一人残りたいとわがままを言って、結局リッツを危ない目にあわせたのは、他でも無い自分自身のわがまままで。

だって、依頼なんてものは存在していない。

探していた写真は、リーファがこの街から去る時に隠したものだ。

「…ごめん…」

「えー？どうしてリーファが謝るの？」

「ん…何となく…」

「変なのー？」

案内するように一歩先を歩いていたフルーラが振り返る。

その時、古城で一際大きな歓声が上がった。

制圧が完了したのだろう。

もうこの街が、ケイオスなどと不名誉な名前で呼ばれることは無くなった。これからは、少しずつ一般の人々がこの街に住んでいき、かつてのリドルムが蘇れば良いなとリーファは思う。

だが、リーファの帰る場所はどこには無い。

この世界の何処にも無い。

そう思うと、胸が締め付けられるし、これからのことを思うと消えてしまいたくなる。

しかし、アイ達と交わした約束のこともある。

「あ…連絡…」

歩を進めていた足が自然と止まり、フルーラは耳に手を当て何かを聞き取ろうとしている。

離れたところにいる相手に、意思を伝える魔法だ。

あらかじめお互いが契約を交わしていることが前提条件であるが、特に暴力的な魔力を有しているものは、相手に対して強制的にメッセージを送ることも可能であった。

「ごめんなさい、リーファ。報告は明日にしましょう。今日はテントで休みましょう」

「何かあったの？」

「ん？隊長も副隊長も忙しくなっちゃって…ね」

「だったら…、フルーラに報告でもいい？」

リーファの申し出に、キョトンとした表情をするフルーラ。

「え？私？何か…急いでる？」

「…。リッツにも話したけれど、私はあの城に依頼達成の為に侵入したの。だから…一刻も早く依頼人に結果を報告したくてね」

嘘ついてごめんね、と心の中で付け足すリーファ。

「え…えっと…」

「…。難しかったらいいや！」

どうしようかと考えあぐねるフルーラを前に、リーファは唐突にニコツと笑いながら言う。

深刻である筈の話題に対して、まあいいや！は軽すぎるのでは無いかという疑いすら浮かぶ。

「忙しいし、仕方ないよね」

「ごめんなさいね…」

「いいのいいの！」

ヒラヒラと手を振り笑うリーファに対して、フルーラは違和感を覚える。この、何処か脳天気なやりとりは、リーファと出会った時と酷似してはいないだろうか。

それに、牢屋にいる時よりも強く感じる深い心の溝。

宿舎を兼ねたテントに着き、何人かの女性騎士団員に挨拶をする時もリーファは、無邪気な子供という仮面を被っていた。リーファは何かを隠している。そう考えても隠されている事を見抜くなんてできないし、彼女の隠し事は尋常ならざる事柄である気がする。

「リーファ、明日の朝…一緒に隊長たちの所へ行きましょう」

「分かったあ」

手をヒラヒラと降る。ニコニコと笑う。
強烈すぎる違和感。

その違和感に対して、何故もつと注意していなかったか、フルーラは後に後悔する。

同時に布団に潜った筈のリーファが、周囲にいる現役騎士団員にすら気配を悟られる事無く姿を消したことが、発見された。

ローデシアの歴史に名を残す、ケイオス浄化事件の裏側の出来事であった。

黒の吟遊詩人

ローデシア王国首都イデア。

街路樹が多く植えられた中央通りは南門から王城を繋ぐ石畳の広い通りだ。

その中央通りに対して垂直に伸びるのは、南から商人通り・教会通り・騎士通りだ。

丁度教会通りから北が貴族、南が市民の住宅地となる。商人通りは南門から入るとすぐ出くわす通りで、その名の通り商人たちが多く店を構える通りで、毎朝市場が開かれる事からも、かなり活気のあ
る区域だった。

夕方の市場。

リーファは人でごった返すその場所にいた。

五百年前には考えられないくらい、市民が活気づいている。その事は単純に嬉しかった。

フルーラの所から黙っていなくなった後、血と泥で汚れた団服は捨て簡素な服を手に入れた。

髪の色を魔法で染め上げ、藍色にした。

正直、フルーラたちから逃げようとも行く宛ても無ければ、目的も無い。ただ気になったから来た街。もう五百年前の面影を残さない街に。

「ねえ！黒の吟遊詩人が来てるみたいよ！」

「ええ！？ホント！？行く行く！」

手にしたカゴの中身を落とさぬよう、年若い少女たちが通りの奥へと小走りにリーファの横を駆けていく。

黒の、という言葉が気になった。昔はよくそう言われたものだ。黒の魔女、黒い化け物。それは全て、白を正義の色として、白い制服を身につける騎士団や王国兵士から投げられた罵声だ。そんな黒が、まるで憧れのように言われる事が気になった。

己をえぐるような思い出を考えながら、リーファの足は少女たちを追っていた。

王都の中心を通る中央通りから離れた、小さな噴水のある市民の憩いの場所と呼べるような広場。噴水の周りを囲む人々は、若い女性が多いような気がする。

噴水の縁に腰かけ、空色のローブを纏う男性。目深に被られたフードから零れる髪は黒。

だから黒の吟遊詩人か、と口にはださず納得する。

「では、今日は恋の話を語りましょう。英雄様の恋のお話を…」

わたし！？と、一瞬パニックになる。驚愕の叫びが口から出なかったのが幸いだ。

いや、かしと思ひ直す。五百年も前に戦争を終結させた黒髪赤眼の少女が自分だと思ふから間違ひなのでは無いだろうか。

帝国の皇帝と刺し違え、僅差で勝利を掴んだのは覚えているが、その後似た容姿の人物が制圧したのかもしれない。

きつとそうだ、とリーファは己に言い聞かせた。そうする事で、落ち着いて物語を聞ける気がした。

「美しき英雄様。強い心と力を持った英雄様。しかし、孤独であった英雄様。戦の最中、彼女は一人の男性と出会いました」

詩人の紡ぐ物語は続く。リーファは次第に強く手を握りしめた。

「彼の名はエズ。圧倒的な魔力を持った為に他人と距離を置いていた英雄様に、エズは気安く接しました」

エズ…。その名は…。

「自分を恐れず一人の人間として接するエズに、英雄様は惹かれていきました。もちろんエズも、英雄様の事を愛していました」

愛、していた？その物語は…本物なの？エズの、本心は？

「英雄様とエズ。仲睦まじく過ごす二人に、闇が覆いました。英雄様が帝国を滅ぼした後に、彼女は戦場で受けた傷が元で亡くなりました。エズは哀しみ、英雄様の物語を作りました。それが…現在我々が語り継ぐ英雄様の物語なのです」

心地好いアルト音域が奏でる、寂しく幻想的な音色と物語。

僅かな時間で人々を魅了した吟遊詩人の前に置かれた入れ物には、小銭がぎっしり投げ込まれていた。

観客が去り、寂しくなった広場で後片付けをする黒の吟遊詩人。

「ねえ。エズは…その後どうなったの？」

目深にフードを被っている詩人の手がぴくりと止まる。
少し悩んでから、詩人はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「エズは指名手配中の盗賊でした。当時の王国にとって、英雄様は存在してはならない人でしたので、エズは詐欺と盗みの罪で捕まりました」

「捕まった…？」

「火焙りの刑です」

あ…、と小さく声がリーファの口から零れる。

盗賊ごときではそんな重い刑に処せられる事はない。リーファの話を広めたからだ。王国にとって秘匿しておきたかった事実を広めたからだ。

「彼の最後の言葉は“俺の語った事は事実で、俺はあいつを愛していた！”」

死にゆく者に許される、処刑直前の遺言の時間。盗賊を火焙りにするという異例の処置に、野次馬として集まった大勢の人々。エズはその人たちの前で、そう叫んだのだ。

「エズ…」

リーファの頭の中には、エズとの思い出が溢れ返っていた。キザでナルシストちっくな盗賊。仲間思いの盗賊頭で、何よりも部下を大事にし部下からも慕われていた。魔女と罵られたリーファに優しくしてくれた人。

「彼は、私にこれを託しました」

吟遊詩人が見せたのは、小粒の宝石が嫌味では無い程度に散りばめられた腕輪。女性用のものだ。

「…?」

「貴女に渡して欲しい、と。“お前にもっと相応しい装飾品、贈ってやるよ”と言う台詞に覚えはございませんか?リーファ様」

ゆっくりとフードを外した吟遊詩人は、黒髪の下の銀色の瞳を優しく微笑む。

見た目の年齢は25、6歳の神秘的な雰囲気を纏う青年。しかし、五百年前に処刑された人物から物を預かっているのは、彼が人では無いことに由来する。

「の、ノワール?」

「はい。ご無事で何よりです。リーファ様」

「貴方どうして? 契約は切った筈よ? 何故こちらに居られるの! ?」

エズの死を伝えた青年に掴みかかる。ローブをくしゃくしゃに掴み問う。

「私は確かにリーファ様との契約を切りました」

契約。それは、リーファが皇帝の居る城に突入する直前に切った。ノワールはリーファと契約した使い魔の一人。契約が切れれば自分たちの世界に帰るのが通常だ。

「貴方たちを巻き込みたく無かったから、よ」

そう言われても、ノワールを筆頭に、使い魔たちは納得ができなかった。殆どは仕方なく帰ったが、ノワールはエズから腕輪を託された。どうあっても、帰りたくは無かった。何より、最もリーファの近くに居た自分のプライドが、リーファの死を認めたく無かった。

「ですから、エズに頼んで腕輪に魔力を込めて貰い、私は腕輪と契約しました」

物質と契約する。それは前代未聞とも言える物だ。その無理を通す為に、エズとノワールは一体何を対価としたのか。何を犠牲にしたのか。

「っ！？貴方！まさか」

ぐいと詰め寄るリーファの頭には、最悪のパターンが想定される。エズの魂を腕輪に封じ込め、その意識とノワールが契約するというもの。魂は、そのままの状態で現世にいと徐々に弱っていく。最期には、来世を期待できない状態になる。更にはそんな弱っていく魂と契約した使い魔にも影響が出る。ノワールの様子から、その想定が正しくて、更にはノワールの魂すら弱っているのが見て取れた。

「私なんかの為に…」

「なんか、ではありません」

ノワールはゆっくりと、しかしはっきりと首を振った。

「我々はずっと貴女について行きたかった。我々の寿命は人に比べればずっと長いですが、私でも五百年が精一杯でした」

傷付き、魔族としての位も力も弱ってしまったノワールは、はかなげに微笑む。

「でも、全く後悔してません。それに、このままならば貴女が天寿を全うする時に私も死ねるかもしれない」

「そ、んな…」

固い決意を口にするノワールに、リーファは口をつぐむ。

「私は、再びリーファ様のお側にいたい」

英雄の望み

「お側にいる事を許して頂けますか？」

グツと強くローブを握りしめるリーファ。俯いた事でノワールからは顔が見えない。が、僅かに震えているのが分かる。

「……………よ」

「え？」

「当たり前よ！私だって！居て欲しい！心細かったの！魔力も削り取られるし！リドルムは無いし！」

ポカポカとノワールの胸を叩きながら、目覚めてからの数日間に貯まった思いを爆発させる。

目が覚めれば、知らない馬車の中で。知らない人たちと辿り着いたのはかつての故郷で。その故郷が今は犯罪都市で。故郷を取り戻してくれたのは、リーファに恐怖と憎しみか与えなかった騎士団で。思い通りに魔法は使えないし、昔と今とで魔法の有様が激変しているし。頼る者は誰もいない。五百年前に親しくなった神様たちも、喚ぶのに命懸け。

「契約していなければ、リーファ様の場所が分からなくて。お側に行けずすみません」

「……大丈夫。切ったのは私。それで苦しかったのも私。自業自得ね」

「それは、悪い癖です」

リーファの癖。自分が傷付く事で物事が収まるのなら、という自己

犠牲だ。時にそれは感情すらも消してしまふ。リーファが受け止める傷は、誰が癒すのか。支えになれないからこそノワールは強く言いたい。もっと自愛してくれと。

「リーファ様、今宵の宿は？」

「まだ。今朝アイデアに來たばかりだから」

「では、一先ず宿へ行きましょう。その服はリーファ様には似合わない」

みすばらしいとも言える衣服を身につけていても、リーファの纏う雰囲気は清浄だった。魔の力をこんなにも持ちながら、リーファの纏う雰囲気は、人が持ち得ない聖。人は神にはなれない。神のみが持ち得る力を持っているのは、彼女が召喚士であり、神々と仲が良からなのだろうか。

ノワールに案内されてやって來た宿は、中央通りからも商人通りからも離れた所にあるこじんまりとした可愛らしい宿だった。レンガの壁にアンティーク調の扉。ノワールがその扉を軽く叩くと、元氣よく少女が飛び出してきた。

「いらっしやいませー！あ！クロさん！お帰りなさい！」

レモン色の髪をお下げにした、リーファと歳のかわらないくらいの子。少女はテキパキとした所作でノワールを招き入れる。

「あら？お連れ様？」

「ああ。彼女も宜しいですか？」

「もちろん！と言いたいけど空き部屋が無いの…」

「部屋は一緒でかまいませんよ」

「へーほーふーん？クロさんが女連れ込むなんてねー？」

少女はニヤニヤしながらノワールとリーファを見比べる。ひとしきり見比べた後、台帳に何か記入して部屋の鍵をノワールに手渡す。

「私はアニー。貴女は？」

「リーファです」

宜しく、と握手を交わしてから部屋に向かった。

「何故、誤解を解かなかったの？クロ」

部屋に入るなり、リーファは呆れた口調で尋ねた。それに、苦笑を返すノワール。

「ノワールも元々、黒という意味ですし。それに、リーファ様が付けて下さったものを他人に教え托は無かったもので」

「そういえば貴方、エズにも教え無かったものね。ってそういう事じゃなくて」

「すみません。友人というよりも手間が省けるかと」

「…。まあ、いいけれど」

殆ど無い荷物をベッドに置き、ノワールは食事をお願いしてきますと言って出ていった。

アイボリーの天井を見つめるリーファ。そのままベッドに倒れ込む。

「これからどうしよう」

リーファの身を縛るものは無くなった。これからは何をしてても良い。戦争に行かなければならないなんて事も、皇帝を倒す必要も無い。最後の二年間があまりにも衝撃で、生活力が無い。やりたいことなど無い。したい事も無い。自由になった事がこんなに重いとは思わなかった。

色々な思考を巡らせ、やりたい事やりたい事…と呟く。

パツと起き上がった。

「やりたい事…あった」

「やりたい事…ですか？」

部屋に戻ってきたノワールにそう告げると、些か怪訝な顔をした。

キラキラとした表情のリーファを見て、何か嫌な予感がしたのだろうか。

「私、ギルドに入るわ！」

「いけません」

「じゃあ盗賊になるわ」

「な…」

あまりの二者択一にノワールが絶句する。盗賊、というのは分からないでもない。エズと同じだからだろう。しかしギルドは何故？とノワールは首を傾げる。

「リーファ様、この時代のギルドはならず者達の集まりですよ」

「構わないわ？」

だから何？と言うリーファに、再び言葉を失う。

「この魔法の力を、破壊では無く誰かの為に使いたい。今更、自分勝手に生きられないもの。そして騎士団は嫌なの」

残ったのはギルドだと言うわけだ。

確かにその選択肢はアリだろう。しかし、ノワールが先程告げたように、ギルドに所属しているものは、皆一癖も二癖もある人間たちばかりだ。

昔は、騎士団に入れるのが貴族だけだったから、民間のお助け屋として機能していたギルドだが、近年は違う。

世間をほとんど知らないようなお嬢様が入る場所とは訳が違うと、ノワールは言いたいのだ。

「リーファ様はご存知無いかもしれませんが、現在は魔法のルール

も何もかもあの頃とは違いますよ？」

「それは分かっているわ。ノワールは、詳しくないの？」

「私は……」

言いよどんだので、知らないのだろうと推測しリーファはため息をついた。

これは、誰かに聞かなければならないのだろう。この世界で生きていくためには。

だが、一体誰に聞いてよいのか。

魔法について詳しい人間なんか、ゴロゴロいるだろうが、この年でご教授願います！と言ったって果たして通用するものなのか。

コンコン

「失礼しまーす」

元気ハツラツと入ってきたのは、夕食を手にしたアニーだった。お盆の上に乗せられた夕食は、ホカホカと湯気がたちおいしそうだ。五百年ぶりに見るまともな食事をリーファは繁々とみつめる。

「リーファさん、何か珍しいものでもあった？」

「いえ……。とってもおいしそうだなぁと」

数種類の野菜を煮込んだスープに、パン。川魚を焼いたものと、刻んだ野菜を漬けたもの。

魔女であった頃は、宮廷のご飯を食べていたわけだけれど、こっちの方が断然おいしそうだ。

「リーファさん、育ちが良さそうだから、お口に合わないかと思っ
たわー」

「まさか、そんな。そうだわ、アニーさん。聞きたいことがあるの」
「何でしょー？」

二人分の夕食をテーブルに置き、首を傾げるアニー。

「この辺りで魔法に詳しい人、知らない？」

「リーファ様！」

「えー？魔法に…？」

「私、実はものすっごい田舎から出てきて、まともに魔法の勉強し
たこと無いの。ノ…クロに聞いても教えてくれないし」

と言いつつ、ギッとノワールを睨むリーファ。

ノワールの表情は、完全に諦め顔だ。言い出したら止まらない、リ
ーファの性格を知っているから。

「んー、教えてくれそうな人かー。パーシーさんとかかなあ。騎士
団で魔道士やってる…」

「騎士団…。他には？」

「他あ？んー…。あんまり詳しくは無いけど…、リーファさんがま
ともに勉強したこと無いっていうレベルなら、大丈夫かも」

「どんな人？」

たずねると、アニーがニカッと笑う。笑顔のまま、アニーは自分自
身を指差した。

「わ・た・し」

「え？アニーさんが？」

その疑問は、ノワールも同様だったようで、同じようにキョトンとしている。

「実は私、こう見えてもローデシア魔術学院を出てるのよ！」

ローデシア魔術学院：と口の中で復唱するリーファとノワール。

だが、いまいちその組織が何なのか掴めなかった。なんせ、五百年前には無かったものだから。

「えー、それも知らない？しつかた無いなあ！ちよっと待っててね。仕事を片付けてからまた来るわ！」

「それなら、私も手伝うわ」

「いーのいーの！此処で待ってて！」

手にしたお盆で、軽く追い払うようにして部屋を出て行ったアニー。半分ほど浮かせた体を、再びベッドの上に戻すリーファ。

「魔術学院て何？」

「確か：百年程前にできた魔法を学ぶための学校ですね。入学するにはかなり優秀でないといけない筈です。それぞれの街や村には一応魔術をそれなりに学べる学校があった筈ですが、それでは物足りないようなレベルの子ども達が集まる学校です」

「と、言うことは、そこに入学して卒業したアニーはかなり優秀な魔道士ってことじゃないの？」

「その：：ようですね：：」

あの能天気でお人好しそうな感じからは、あまりそう見えないが：とリーファは感じる。

しかし、昔は魔道士といえは殆ど戦争に使用する兵器のようなものだったし、あるいは何か便利なものを発明する研究員のような存在

であったから、今は違ふのだなあという感想でしか頭の中を纏められないのであったが。

アニーの魔法教室

仕事を片付けて、後はオーナーに引き継いだというアニーが、幾つかの本を手にして部屋を訪れた。オーナーとはアニーの父親で、料理長は彼女の母親ではあるのだが。

「さて。まずは魔術学院の説明かしらね？ざっくり説明すると、魔法を習うための学校よ」

「それも、とても優秀な？」

リーファが尋ねると、うーんと唸るアニー。机を挟んでアニーと向かい合ったリーファとノワールは首を傾げた。

「基本は貴族。市民から入学できる子はそれなりに優秀よ。貴族でも魔力のカケラも無い奴はいないけど、平均的な魔力があれば入学を許可されるの」

未だに、お貴族様々って訳よと呆れた口調でアニーは告げる。

「で、学院の事はこれくらいにしといて。魔術の基礎から。魔術を大まかに体系して？」

できる？と聞かれ、体系か…と悩む。

「召喚型・瞬間型・永続型？」

「古っ！！」

ビシッとアニーの突っ込みが入る。

召喚・瞬間・永続の内、召喚は使い手がほとんどいない魔法だ。

瞬間型とは、炎の球を発射したり、遠く離れた場所に移動する魔法。永続は、罨であったり幻影であったり物質変化であるといった魔法。こちらも現在においては使い手がごく僅かしかないものだ。

「リーファが言ったのは、四百年くらい前には主流だったものね。今は、攻撃・回復・補助よ」

攻撃は更に、火・水・雷・風・土・光・闇に分かれる。補助も回復も分類は無い。

攻撃の7タイプも、光と闇を使えるものはほとんどいないそう。このローデシア王国内において光の属性を持つのは、大司祭と呼ばれる人間唯一人。

闇にいたっては、過去その使い手がほとんど魔物であったことから、調査も行えないそう。

ヘーと相槌を打つリーファは、随分と変わったなあとと思う。しかし、召喚型の使い手がほとんどいないとは……。リッツ達の前で召喚魔法を使った事が悔やまれる。しかも、喚んだのはアイ：時間を司る神アイオンだ。

「因みに私は攻撃魔導士よ。攻撃を専門として学んだの」

「え？全部使えないの？」

「まさか。世界最高の魔導士でも3体系全てなんて不可能よ？」

現在、国内最高の魔導士は攻撃を4タイプと補助の一部を習得しているのだとか。

「1タイプの魔法だけならソロ。例えば、私は風しか使えないからソロなの」

2タイプならばデュオ、3タイプならばトリオ、4タイプならばカルテット、5はクインテット、6はセクステット、7はセプテットとなる。

それぞれのタイプの中にも初級魔法、中級、上級、最上級の魔法が存在する。最上級まで習得すれば、そのタイプのマスター称号が貰える。

「アニーさんはマスター？」

「無理無理！私の師匠がウィンドマスターだけどねー」

「凄いのね。魔法ってそんなに階級を区切らなければならないの？」

リーファにしてみれば不思議なことだ。昔はもっと自由だった。魔導士に称号なんてものは必要無くて、魔力量だけで優劣はついた。

「魔導協会の取り決めだもの…。考えがあつての事じゃない？」

「ふーん」

「さて、お勉強はここまで。何か質問は？」

「あ、はい！」

先生よろしく区切りをつけたアニーに思わずこちらも釣られる。学生のように手を挙げてしまった。

「1番便利なタイプって？」

「便利…ねえ…？」

うーん、と悩むアニー。

「便利ってのは無いと思うわ。火と水って相性悪いけれど、火力があれば水に負けなかったり、やり方によっていくらでも有利にも不利にもなるのが魔法だからね」

アニーの言葉を聞いて、リーファは苦笑する。

確かにそう言われてしまえばそうだ。ソロの場合特に、自分と相性の悪いタイプと出会った場合の戦術を考えることが重要になってくるのだろう。

今までの戦闘では、相手の繰り出す魔法に応戦したり、圧倒的な破壊力で相手を叩きのめすことが多かったから、戦術というのを考えたことがあまり無い。

アニーの話によれば、現在のリーファは攻撃魔法で考えただけでもセブテットだろう。更に言えば、使われなくなって久しい魔法すらつかえるのだから、世界の常識をひっくり返す存在だ。だから、1つのタイプに絞ろうかと思ったのだ。

あるいは、2つでも良いだろう。ならば、何と何をチョイスすべきなのか迷う。

「風の使い勝手はどう？」

「え？…使い勝手？まあ、いいわよ。相手が風を視覚的に捉えられない場合が多々あるから、そういう意味では便利かもね」

風を1つめにするとして…相性的に考えて、雷と土は除外すべきだ。ならば、火か水。魔法を放った際の派手さを考慮すれば、目立たない水の方が使い勝手が良いかもしれない。

「アニー、私たぶん…水と風を使えると思うの」

「ええ！？デュオ！？凄いわね！」

ああ、デュオでこの反応か…と少々嘆きたくなる。

これで、全タイプを使用可能だとバレたあかつきには、一体どんなことになるのか…知りたくも無い。

「で？魔法が使えるなら、大した疑問点は無い筈だけれど…」

「ううん。さっきみたいに、私の知識が古いから聞きたかっただけなの。でね、私このアイデアに来たのはギルドに入るためなの。どうしたらいいか、分かる？」

「ギルドに…？」

アニーの表情が、笑顔から一瞬で陰しく変わる。

ノワールが言った、ギルドがごろつきの集まりである事と何か関係があるのかと訝しむ。

「ギルドは…あんまり若い子にはお勧めしないわねー」

「ゴロツキばかりだから？」

「犯罪者くずれとかもいるし、ルールはあるけどモラルが無いのよねーあそこは。どうしても入りたい？」

「ええ。どうしても」

リーファの意思を確認するかのように、アニーが目を覗き込む。

青空を切り取ったような瞳の中に、鋭い決意を垣間見た気がして、アニーは苦笑した。

この少女…リーファには誰が何と言おうと言葉を実行する意思が見て取れる。彼女のお目付け役のような存在であるクロが諦めのような表情をしている事からも、彼女が有限実行タイプだと予想ができる。

「アイデアのギルドに、知り合いがいるわ。紹介してあげる。ギルドで何をしたいのかわからないけれど、気をつけてね」

「ありがとう、アニーさん」

「クロさんは？ギルドに登録するの？」

「私は…」

「クロはしないわ」

「…しないの？」

「クロは必要無いわ。ギルドに登録するのは私だけ」

クロ：ノワールの言葉を鋭く遮る。元々ノワールは使い魔だ。

今は腕輪との契約によって、かろうじてこの世に存在をつなぎとめているだけだ。魔法なんて使ってしまったら、その身に何が起こるのか。

最悪の場合、魂ごと消えてしまうかもしれない。

それだけは…その事態だけはリーファにとっては避けたいものだった。

頼るものもないこの世界で、ノワールの存在は本当にありがたいものだと感じている。

最期の戦いの前に勝手に契約を切ったはずなのに、それでもこうしてついてきてくれる、五百年の時を生き永らえてくれたことには頭が上がらない。

だからこそ、彼を消すわけにはいかない。

腕輪との契約によるペナルティで、彼の魂は格が下がってしまった。あと一回の違反で消えてしまうかもしれないと思うと、どうしても慎重にならざるを得ない。

いつまでも傍に居て欲しいと願うのは、私の我侭だ。

さよなら、私の平穩

翌日、アニーに連れられてイデアのギルドを目指す。

町並みは昔と比べて随分と賑やかになり明るい空気が漂う。ただそれだけでは無く、何やら大きな催し物でもあるのか活気がある。

「アニー、お祭りでもあるの？」

「三日後に英雄祭があるの」

英雄祭：とリーファが口の中でその言葉を繰り返す。知ってた？とノワールに聞くと肯定の意。

英雄様の死んだ日なのか生まれた日なのか分からないが、また、建国記念の日との区別も曖昧らしい。英雄という偶像崇拜のような祭は、意味の薄い祭ではあったが、生まれる利益を考えれば意味のある祭らしい。

生まれた日でも死んだ日でも無いだろうなあと、思い描く。どちらも寒い季節だった。が、今は暖かく過ごしやすい季節だ。

「ここよ、リーファ」

大通りからは少し外れた：丁度、アニーの宿屋と大通りを挟んで対極に位置する、ブロック積み大きな建物。厳つい雰囲気扉の両側にはこの国、ローデシア王国の国旗が立ててある。

民の味方の何でも屋、といった存在だった頃とは似ても似つかない。しかし、成らず者が集まるという雰囲気でも無い。

呆然と入口で立ち尽くすリーファ。その見つめる視線の先、入口から金髪の女性が出てきた。美人と言い難いが、そばかすとえくぼがチャーミングな女性だ。

「あら？アニー？」

「久しぶりねーイリ。魔術学院卒業式以来かな？」

「ホントよ！あんたアイデアに帰ってきてたの？言いなさいよ！」

何やら旧知のようだ。口ぶりは同級生の久々の再会のようだが、アニーは15、6歳と、リーファと変わらない位なのにイリは二十歳を越えている感じた。

「アニー、この方は？」

「初めまして、お嬢さん。私はイリ。このアイデアギルドの看板娘よ」
「よく言うわー。25にもなって！」

「同じ年に言われたく無いわー」

えっ！と、リーファとノワールが驚き飛び上がる。アニーは見た目十代だ。

「アニーは事情があってね」

「ま、大した事じゃないわ。二人とも、イリに案内させるからおいで」

魔術学院の元学生は楽しそうに中へ入っていった。

「ノワール、気づいた？」

「魔法、ですね」

「永続型の物質変化……。中々の使い手ね？」

アニーにかけられた、アニーの年齢を変化させる魔法。あれは常に魔法をかけられている状態となる永続型だ。昨今滅多にいないというその使い手が何者なのか。事情とは何なのか。

「今までは、臍げにしかその魔力を感じられなかったけれど、事実

が分かれば話は違うわ」

アニーが望めば、アニーの魔力を借りてリーファがその呪いのような魔法を解く事が可能だ。

時期を見計らって、アニーに話そう

。良くしてくれたお礼だ。

先に行ってしまった二人を追いながら、リーファは決意した。

屋内は、外観通りのものだった。ブロック積みの無機質な壁に、武骨な人間がよく似合っている。灰色を基調とし、調度品はモノトーンと冷たい雰囲気だ。

受付とおぼしき場所には、イリと同年代の女性が立っていた。アニーとイリが何やら受付の女性に話し掛けた後、こっちにおいでと手招きした。

「名前は？」

「リーファ・ロー…えっと…」

淡々と尋ねられた無機質な質問に当然のように答えようとして慌てる。リーファ・ローデシア。王国の犬になる証として奪われた名前。ローデシアと名乗るよう、それが誉れであると振る舞うよう散々言われてきたのだ。不意に口についてでてきてもおかしくは無い。

が、ローデシアの姓を名乗ることはすなわち王族を意味する不用意に此処で名乗ってしまうば、要らぬ騒ぎになる。

長らく使うことを許されなかったファミリーネームを、やっと使うことができる…。

「リーファ・ローエツト様ですね？」

「え？あ、はい…」

「では、あちらの部屋で魔力測定を行って下さい」

「魔力：測定？」

「属性の判定と魔力量。あとは戦闘能力の測定です。自動判定ですので簡単ですよ」

まずいっ！！

名前が間違われた事なんてこの際どうでも良くなるくらい、魔力測定はやばい！

自動判定されたら、セプテットじゃすまなくなる…。どうしよう。

リーファが必死に対策を考えている間に、書類の作成は終了してしまった。アニーとイリがしっかりとリーファの手を取り、大きな扉をくぐる。

白を基調とした部屋。が、足元は地面のように色が塗られ、天井も空が描かれている。

「リーファ頑張ってねー」

「全力出さないと死ぬわよー」

「え？」

イリとアニーの言葉に、リーファとノワールが驚くが、その瞬間に扉が閉まる。たった一人、異質な空間に残されたリーファには不安だけが残った。
部屋の作りなのか、白い部屋だからなのか奥行き感がよく分からない。

ザザッ

映像にノイズや砂嵐が混ざったようなものが人型を取った。
敵か、と身構える。

ノイズの人型は、一瞬少女の型をとろうとして…砕けた。

「えー、まじかよ」

少年の声色が聞こえてきた。辺りを見渡すと、ノイズの人型が砕けた所よりも遥か後方から、大小様々な鈴を身につけた不思議な服装の十歳前後の少年。

「あなた、何？」

「それは俺が言いたい。お前何？人間じゃ無いだろ」

「……」

言われ慣れている。化け物だなんて言葉は。でも何故？こんなにも辛い。彼には、罵倒の言葉として使用している感じが無いからだろうか。

「あー召喚まで使えるの？世界がバランス失うじゃん」

「……」

「お前、ギルド来てる場合じゃない。本体探せよ」

「え？」

「本体。今は殆ど聖霊みたいな事になってる」

「だから、魔力が無いの？」

気付いてたのか、と軽く笑う。

聖霊とは、アイオンたちのような状態だ。彼女は神であるが故にこの世界に実体を伴って顕現することはそれこそ世界に歪みが生まれ

る。だから霊体のような不安定なものとして本体から力の一部を切り取り召喚される。それでも強い力を持っているアイオンたちは、実体がもつとずっと強いからだ。

今、私とその状態だと言われ、僅かばかり納得がいく。魔力が極端に少なくなっていること。人間が持つ筈の無い、聖の属性を持っていること。

長い眠りの中で、普通に生きたいという願望の表れかもしれない。

「探せよ本体。今、この国は呪われてる」

「え？」

「さっきお前と一緒に来た女。あいつも成長を止められてるな。呪いだ」

アニーの事だ！

「あの呪いは何？」

「さあね。ただ解くのに苦労するらしいが」

と、不思議な少年は笑う。完全に他人事だ。

「まあギルドにいるのもアリかな。解呪の以来は放置されてる状態だし？ お前なら分かるだろ？ あれの解き方」

分かる、と言えば分かる。永続型の魔法が廃れた理由に、術式の複雑さがあると考えている。魔道具を使ってもできない、ある意味職人技・感覚がものを言う方法だからだ。それに面倒というのも大いに納得できる。

複雑な言葉と数字と文様は、見慣れない人にとってはただのマークでしかない。魔法はある意味センスで成すものだけに、それ以外のルールは廃れてしまうのは仕方が無い。

「頼むぜ。俺達には手が出せない」

「それってまさか」

聖霊のようなこの少年に手が出せないと言わせるこの呪い。じわじわと苦しめていく、決して殺しはしない苦しませ方は…憎惡を持った人間のする事だ。

「ギルドに登録してやるよ」

「…どうも。ねえ、魔法タイプ…水と風にしてくれない？」

「まあ…騒ぎになるもんな。いいよ」

ホッとする。それが気になっていたからだ。この試験のシステムを軽く説明してもらい不思議な空間の広がる部屋を退室する。

「頼むぜ、英雄様」

え？とリーファが振り返ったが、そこに少年の姿は無かった。

「如何でした？」

扉のすぐそばで待機していたノワール。部屋の中で起こったあらましを伝えると些か表情が曇る。

「そんな顔をしないで」

五百年前となんらかわらない事態になっているのでは無いかと危惧しているのだ。困った人を助ける、ただそれだけの存在に、戻って欲しくないとなワールは強く思っている。

「昔とは違う。ね？」

「え、ええ」

そう違う。今は…エズがいない。あの頃、リーファの精神を支えていた彼がおらず、手元には腕輪が残るのみ。

ギルドへの正式登録の為に、受付に向かったリーファを慌てて追いかけた。

「あ、おかえり」

受付のカウンター内にイリがいて、カウンターごしにアニーと雑談していた。リーファを見てニコニコと手を振る。

受付の女性に声をかけると、データは届いておりますとの事。自己申告だと嘘を言う人がいるから、こうしてあの少年がデータを受付に送るのだ。志望者の分身を少年が作り、志望者はそれと戦う。戦闘データは受付に送られ、属性や戦闘タイプ、能力によってランク付けされるというシステムだ。

「リーファ・ローエット様のランク及び属性ですが……………え？」

「え？」

始動

受付の女性の、放心したような表情と声音に嫌な予感がする。

「と…トリオ!？」

「なっ!？」

デュオにしろとあれ程!と今更あの少年に怒っても仕方ない。受付の女性の悲鳴に、イリとアニーが寄ってきて、書類を見たイリが再び驚きの声をあげる。

「水と風と火いゝ!？」

「うそっ」

その属性はなんだ…と言いたい。とっても。付け加えるならば治癒か補助で良かったのに。

「すごいわ。15歳でこんな…。あのハロル様でも3属性を身につけられたのは20を過ぎた時だったのに」

ハロル様、とは世界最高の魔導士のことである。4属性と補助、つまり5タイプを持つ方である。アニーから教わった。

9タイプマスターなんて知られたら大変な事になるな…いや、既に召喚術もバレてるし。

今は別の要因が絡んでいるが、ノワールだって常に実体を持っているのは、永続型魔術だからだ。

「すごいわねリーファちゃん。有史以来の快挙じゃない?もう貴女が英雄様でいいわあ」

イリの言葉に、アニーも盛り上がる。

いいわぁというか本人だとは絶対に言えない。

軽く騒ぎになったが、何とか通常通りに説明をしてもらい、依頼の受け方を教わる。

木製の掲示板の前で気になる依頼を選ぶ。その紙を受付まで持つて行き、ギルド員の証である腕輪に情報を入力する。これでいつでも依頼内容が確認できる。

永続型の魔法であれば、紙を異空間にしまっておくことも可能であるが、こういった機械的な技術が発展したからいらなくなったんだろうなと感じた。

リーファの腕には、エズから貰ったものとギルドのものが共にある。大切な人から貰ったもの。大切な人が薦めてくれた生き方の証。腕をもがれようとも離すまいと決めた。

「それで…これからどうされるおつもりで？」

「解呪？」

ギルドに入ることが目的であって、リーファの中にこれといって具体的な目標は無かった。エズが言ったように、自由は最高だと感じたかった事、ギルドに入りやりたい事をやれという言葉の意味を知りたかった事。ノワールに聞かれた所で、疑問形になってしまう。

「まずは、アニーの呪いを解きたい」

「呪いを解けば、有名になります。そうなればまた…」

英雄として祭り上げられ、リーファの意志は失われてしまう。もう二度とあんな思いはさせたくないと言うのに。

「人を殺す事はないわ。少なくとも呪いを解いている限りね」

だから平気と伝えたかったのか。リーファは曖昧に微笑む。

「ノワールは、吟遊詩人を続けたい？」

「まさか！」

ずっと側にいると言ったのに。腕輪との契約で魂の質こそ下がって
はいるが、こうして実体化は可能だ。

「泣き言言うの、申し訳無いなあって」

大人びていたって、どんなに強くたって。リーファはまだ15年程
しか生きていない。子供だと言うのを忘れさせてしまうのは、彼女
の人生を知っているからか、彼女の人生がそうさせてしまったのか。

「ありがとうノワール。心強いわ」

「エズ様の約束だけではありません。私の意志で、お側に居たいの
ですから」

その言葉を、リーファは曖昧な微笑みで受け止めた。

それからすぐに掲示板に手を伸ばし、ちぎりとったのは依頼の書か
れた紙。

“呪いを解いて！”

たどたどしい文字で書かれたそれを手にし、鋭い目付きになる。呪
いの内容は、声を奪われた事。

依頼を出したのは少年か少女か、まだ幼い子供のようにだ。

一つ深呼吸をして、その紙を受付に持っていく。処理は機械がやるようだった。受付横に設置された機械に、依頼の受理ナンバーを入力し、腕輪を置く。

ピピッ

軽い電子音がして、機械のランプが青から赤へと変わった。

「これで、完了のようね」

「早速向かわれるのですか？」

「ええ。だって、この子の依頼、一ヶ月前だもの。もしかしたら、手遅れになっているかもしれない。早いほうがいいでしょ？」

肩をすくめて、スタスタと出口へ向かうリーファを、ノワールは必死で追いかけた。

カランカラン

鈍いベルの音が鳴り、来客を店の人に伝える。

しかし、いつまで経っても誰も出てこない。

「すみませーん」

リーファの声が、誰もいない、薄暗い店内に響き渡る。手遅れだったか・・・？とリーファが舌打ちしたとき、ガタリと店

の奥・・・階段の向こうから音がして。

「・・・だ・・・だれ・・・？」

怯えた瞳の、十歳くらいの少女が現れた。

顔色は悪いが、栄養面では問題ないようだし、衣服も地味ではあるがボロボロというわけではない。

誰か彼女を世話する人がいるようだ。

依頼人らしき人物の無事を確認してホッとため息をつく。

「あなたがセシルちゃんかしら？」

「え・・・え？だ・・・だれ！」

「怖がらないで。ギルドの依頼を見て来たの。困っていることがあるんでしょ？」

此処に来了た目的を話すと、少女の目が驚愕へ、そして希望を混ぜた不思議な表情に変わる。

店内の隅にある、机と椅子に腰掛ける。

十歳の少女が、たどたどしくもお茶を入れてくれた。かたや十歳の少女、かたや十五歳の少女。

今は、セシルが椅子に座り、リーファは店内をキョロキョロと見て回っている。

ノワールは店の入り口で警備員よろしく立たされていた。

「で？呪いっていうのは？」

「あ・・・あの・・・私の家・・・雑貨屋さんだったの」

店内に置かれたディスプレイの中も、展示机の上も何もかもに布がかぶせられている。

壁に掛けられた装飾品や店内のデザインを見ても、若い女性に人気があったであろう可愛らしい雑貨屋が・・・イメージできる。

「そうみたいね。布がかけてあるのは？」

「今は・・・お休みだから・・・」

「ふうん・・・。あ、これは？」

店内の布をチラチラと捲りながら、品物を見ていたリーファの手が止まる。

キラキラした宝石の欠片をふんだんに使った、蝶の模様の髪飾り。普段使いじゃなくて、晴れ舞台か何かで使ってもいいんじゃないかと思える精巧な作りだ。

「あ。それ・・・お母さんが作ったやつで・・・綺麗・・・でしょ？ 私もすつごく気に入って・・・」

「他のに比べてちょっと高いね」

「うん・・・それ作るのに時間かったーってお母さんが。でも、すつごく気に入ってるの、それ。良い出来だーって」

そう言って、切なそうに笑う。

レジのすぐ近くに飾られていた髪飾りの上に、丁寧に布をかぶせ、リーファは改めてセシルと向かいあって座る。

「お母さんが、ある時出かけて行って。帰ってきたら体調悪いって言って、寝ちゃって。次の日から・・・声が出なくなって」

「その後は？」

「最初は、声が出ないだけで。お店も、なんとかできてたの。お父さんも一緒にやってたし。でも、段々目が見えなくなって。耳が聞こえなくなってる」

「今は？」

「もう・・・もう・・・起きられないの。寝てるだけなの。お医者様も、原因分かんないって・・・たぶん呪いじゃないかって」

「呪い・・・」

「呪いは、ずっと昔の魔法で。騎士様に聞いても分からないって・・・。最近流行ってるけど・・・どうしようも無いって」

「だから、ギルドに依頼を？」

少女の目には、いっぱい涙。

次から次へと溢れてくるそれが、ポタポタと埃つもった机に落ちていく。

段々弱っていく母を、何も出来ずに見るだけというのが、十歳の少女には何と酷であったことか。

「ギルドは・・・たくさんお金を取られるから、ダメだってお父さんが言ったんだけど。騎士様が、もしかしたらギルドの登録者の中に呪いが解ける人がいるかもしれないって。もし、その人が無理やりお金を取ろうとしたなら、騎士様に言えば助けてくれるって・・・」

「セシルちゃん」

ガタリ、と大きな音を立てて立ち上がれば、ビクツと震える少女。

「呪いを解くのは、正直かなり疲れるし大変なの。その人がお金を欲しいと言ったら、あなたはあげなきゃいけないわ。だってお母さんを助けてくれた人なんでしょう？お母さんとお金のどっちを選ぶの？」

「ちが・・・！そんな・・・！」

「お願いしたのはセシルちゃんでしょう？だったら、セシルちゃんは何とかしなきゃいけないよね。その騎士様に頼ってばかりじゃ、いずれ貴女が不幸になる」

「だって・・・だって・・・」

ヒクヒクと泣き始めたセシルを横目に、リーファは店内をゆっくりと品定めするように歩く。

「お金は・・・無いの。ほんとなの。お店もお休みして・・・お父さんも、お母さん助けるために色んな人をお願いしてて」

「それくらいは、分かるわ」

「だから！」

「私は、ギルドの登録者よ？タダで働くななんてしないわ
「っ！」

希望に満ちていた少女の瞳が、絶望の色に染まる。

「だから、報酬はこの髪飾りと、2000でどう？」

「・・・え？う・・・え？」

「2000くらいなら、おこづかいで出せそうじゃない？もしくは、ちよっとくらいお父さんに手伝ってもらうとか。それとも何？この髪飾りが無くなるのがいや？」

「ち、ちが・・・！え？たくさんのお金は？」

「2000ってセシルちゃんにとって、たくさんのお金でしょ？」

ポカーンと口をあけたまま、固まるセシル。

「お母さん助けたいんでしょう？」

「も！もちろん！！」

「呪いが解けたら、髪飾りと2000。これ以上はまけられないわねー」

「お・・・お姉さんは、いいの？」

「私が言ってるのに？」

「あ……。あ、ありがとう!!」

お母さんのところに案内して、というと満面の笑みで二階へ案内してくれる。

ノワールはそのまま待機。

リーファが階段を上がりきると、そこは濃い魔の匂いに満ちていた。ここにいるだけでも、健康な人間が病気になるってしまうのではないかと思うくらいに。

「セシル……。お友達かい？」

困惑した表情で立っていた、まだ三十少し手前くらいの年齢の男性。同年齢の男性と比較して、やや痩せているような印象を受ける。

「お……。お父さん。このお姉さん……。お母さんの呪いを解いてくれるって……」

「な！セシル！どうやって！」

「あ……。あの……。ギルド……」

「ギルド！？あの法外な金額を根こそぎ奪っていくやつら！？いくらまだ子どもだからって、」

「待って」

リーファの冷えた瞳が、男性を捉える。
ぐっと言葉につまる男性。

リーファはただの十五の少女ではない。

多くの人を殺した。

多くの人を傷つけた。

多くの人の死を……。今までの生の中で見てきた。

この平和な世界ではお目にかかれない、人を殺せる視線。

「私は、セシルちゃんと契約したの。申し訳無いけれど、あなたには関係ないわ」

そのまま、男性の真横にあるドアノブに手を掛ける。

その動作にハッとした男性が、リーファを止めようとして・・・それをセシルが止めた。

「お父さん！このお姉さんは、違う！前みたいな人じゃない！」

親子の会話を無視して、リーファが開け放った扉。

人形のように横たわる女性。

その女性からあふれ出てくる、魔の気配。

アニーの呪いよりも進行が早く、アニーの呪いよりも呪いの度合いが濃い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6747q/>

虚無の魔女から英雄サマへ

2011年7月23日23時20分発行